

陶器職人における専門家アイデンティティの生成と継承Ⅱ

— 島袋常秀工房の師弟関係から見た世代継承性のミクロな分析 —

岡本 祐子

Generativity of professional identity in potters II:
A microanalysis on achievement and successive process of potters' identity
through master-student relationship at Tsunehide Shimabukuro studio

Yuko Okamoto

本研究は、**Profession**の生成と継承に関する第二研究として、**Erikson(1950)**の精神的分析的個体発達分化の図式の視点から、陶器職人の熟達のプロセスを実証的に検討した。沖縄県読谷壺屋焼の代表的な陶芸家である島袋常秀教授に対する個人面接から得られた語りを師弟関係に重点をおいて分析した。工房への入門から独立までのプロセスにおいて、入門の主体性、作陶の全工程に責任をもつこと、師を「見て技を体得する」こと、美を感じ受けとめる力とそれを消化し作品として生み出す展開力など、7つの重要な課題が見出された。個体発達分化の図式におけるI~V段階の心理社会的テーマが、専門的職業の次元でも再度重要な意味をもつことが示された。また、職人の**Professional work**の重要な課題である職業世界における「基本的信頼感」と感性を支える沖縄の文化的風土について考察した。

キーワード: 専門家アイデンティティ, 世代継承性, 師弟関係, 陶器職人

問題と目的

「世代継承性」の危機の時代

Profession(専門的精神と技)の継承とは、どのような営みなのであろうか。文化・芸術・技能・学問・宗教などの世界は、古いものと新しいものが重なり合いながら、ゆっくりと変容していくものである。特に**Profession**の世界は、どの時代においても、社会や人間の営みをリードする役割を果たしてきた。それら各々の**Profession**の世界の中で個人の達成した専門性は、どのような過程を経

本研究は、2009-2012年度 文部科学省科学研究費補助金基盤研究(C)「3 専門職種における生成継承性の心理的特質と発達過程に関する研究」(課題番号 21530691, 研究代表者 岡本祐子)の一部として行われた。

て次世代へ受け継がれていくのであろうか。私たちは、ズームレンズをひいたマクロな視点から、歴史としてそれをたどることはできる。しかし、師や先輩世代と自世代、さらに次世代との face to face の人間関係における継承の心理のプロセスは、あまり解明されてはいない。また、個人がプロの仕事師として自立し熟達するための鍵となるポイントも、心理学的にとらえることができ、他の専門領域の次世代育成にも応用可能と考えられる。しかしながら、その具体はあまり明らかにされていない。

今日は、世代継承性の危機の時代である。具体的には、戦争体験などの、継承されるべき過去の重要な事実が語り継がれないこと、継承者がいないために、途絶えようとしている高度な技芸が、現代の日本社会に多数、存在することなど、さまざまな面で上の世代の経験や智慧が受け継がれない事態が生じている。

世代継承性の危機という深刻な問題の背景の一つは、Profession を受け継ぐ最も重要な人間関係・装置である「師弟関係」が希薄化していることが大きな要因ではないであろうか。四方田(2007)は、その背景として、

- ①情報伝達方法の驚異的、脅威的な発達のため、先生に直接教えを乞わなくても、研究に必要な情報の多くはインターネットで得られること、
- ②師弟関係は濃い上下関係であるが、このような父権主義はあまり尊重されなくなったこと、
- ③知識人も無知人も皆、平等という大衆民主主義の弊害、

を挙げている。この3つは、私自身も深く同感するところである。さらに、専門的仕事を担うために不可欠な、基本的な人間的な強さ、深さ、成熟性等の劣化も、背景にある問題として考えられる。それは、活力、自我の強さ、関係性形成力など、人間的な強さそのものにも当てはまる。かつて社会の随所で見られた「先生を尊敬し、力の限りを尽くして学ぶ」という師弟関係が希薄化してきたことによって失われつつあるものは少なくないと考えられる。

世代継承性の意味するところ

世代継承性は、よく知られているように、Erikson(1950)が Generativity という言葉でとらえた概念である。それは次世代の創生とケアを意味し、①次世代を生み出すことと育てること、②ものを生み出すこと・創造すること、③他者を支えることなどが包含される。また、McAdams(1998)は、Generativity は、世代連鎖的關係性と自己完結的個性性の2つの特質をもつと述べている。世代連鎖的關係性とは、自分が生み出したものをはぐくみ育て、次世代へ受け継いでいく営みである。自己完結的個性性は、自分の人生において、何ものかを創造する、一つの価値の高みを自らが示すことを意味する。いずれも世代継承性の重要な側面であり、両者が入れ子のように関連しあって、世代継承性は達成されていくと考えられる。しかしながら、改めて考えてみると、自己完結的個性性は、どのように継承されるのであろうか。先代からその精神性と技を受け継ぎ、自らさらにそれを磨き上げ、次世代へ継承していく営みの具体は、あまりわかっていない。

別の視点から見ると、世代継承性は、マクロな継承とミクロな継承という2つの次元が存在する。マクロな継承とは、世代から世代へ受け継がれた包括的な継承であり、不特定多数の他者を相手に、

価値の世界を伝えていくことである。ミクロな継承とは、師から弟子への man to man, face to face の継承であり、口伝の形をとることも少なくない。ミクロな継承は、心理的なプロセスとして読み解くことができると考えられるが、いまだ未開拓の分野である。

研究の目的

現代の師弟関係を通じた Profession の生成と継承はどのような営みなのか。それを、心理学の理論で読み解くとしたら、どのように理解できるのだろうか。本研究は、このような問題意識を土台として、職人の師弟関係を通じた Profession の生成と継承のプロセスとその特質を、以下の点から実証的に検討することを目的とした。

1. 上の世代から何をどのように、受け継いだのか(自分の自立のプロセス)。
2. 次世代へ何をどのように、受け継がせようとしているのか (弟子の自立への援助のプロセス)。
3. 師の側と弟子の側から見た世代継承性の具体はどのようなものか。

具体的には、①生い立ちから職人として自立するまでのプロセス、②仕事における危機や転機、③特に職人としての熟達のプロセス、④上の世代から何をどのように学んだのか、⑤次世代に、何をどのように伝えようとしているのか、についての語りをていねいに聴き、アポステリオリに分析した。その後、その語りから得られたプロセスが、Erikson(1950)の精神分析的個体発達分化の図式 Epigenetic Schema にあてはめられるかどうかについて検討した。

上記の3つの目的のうち1.については、岡本(2010)において報告した。本稿では、目的2.および3.について論じる。

Profession の生成と継承に関する仮説的視点

本研究では、次の2つの仮説を、分析の視点とした。

(1) 専門家アイデンティティの4つの段階

専門家アイデンティティの達成には、以下の4つの段階が存在するであろう。

- I. その専門世界への方向づけ・志向までの段階
- II. 専門世界に参入から自立までの段階
- III. 専門家としての自立・深化・拡大の段階
- IV. 次世代の育成の段階(III.に重なる)

段階II.以降は、師との関係の変容過程が、段階IV.では、弟子との関係性の変容過程が、それぞれ見られるであろう。それぞれの段階には、Positive な側面と Negative な側面の双方が、また師弟関係性の深化と危機がみられるであろう。

(2) 専門的職業レベルにおける心理社会的課題の再体験のプロセス

専門的職業レベルにおいても、Erikson(1950)の精神分析的個体発達分化の図式に示された心理社会的課題の再体験のプロセスが見られるであろう。つまり、弟子は、固有の専門的職業の選択(Stage V: アイデンティティの達成)後、その専門的職業の世界において、Stage V-1(専門世界における基本的信頼感)から Stage V-5(専門家アイデンティティの達成)に至る各段階の心理社会的テー

マが体験されるであろう。一方、師匠は、弟子を受け入れ、後継者養成に関わる StageVII(世代継承性)において、StageVII-1(次世代を育てる上での基本的信頼感)から StageVII-7(専門家を育て上げる)の心理社会的テーマが体験されるであろう。

職人の専門家アイデンティティの生成と継承に関する本研究では、研究Ⅰにあたる岡本(2010)において、仮説(1)を実証的に検討し、Ⅰ~Ⅳの段階が具体的に示された。研究Ⅱにあたる本稿では、仮説(2)を中心に考察する。

研究の方法と対象

本研究では、沖縄県立芸術大学教授であり、読谷壺屋焼を牽引する代表的な陶芸家である島袋常秀氏の人と仕事にもとづいて、上記の目的について具体的に検討した。つまり、島袋常秀先生の専門的仕事をコアとした生涯の物語を聴かせていただき、師弟関係を通じた世代継承性について考察した。それは、島袋常秀先生固有の人生と経験でありながら、多くの普遍的特質が内包されていると考えられたからである。沖縄の壺屋焼の歴史と、島袋常秀先生については、岡本(2010)において紹介したため、本稿では割愛する。研究Ⅰでは、島袋常秀先生に2回(約6時間)の面談を行い、目的1にあたる専門家アイデンティティ形成の4つの段階と、専門的職業レベルにおける心理社会的課題の再体験のプロセスの具体を明らかにした(岡本, 2010)。研究Ⅱにあたる本稿では、その後の2回(約5時間)の面談も合わせて、島袋常秀陶器工房における弟子の入門から独立までのプロセスと、親方として弟子を育てる視点とポイントについて伺った。研究Ⅱでは、それらの語りの内容にもとづき、目的2と3について実証的に考察した。

面談の内容は、表1に掲げたとおりである。これらの諸点について、着眼点を添えて質問した。面談にあたって、何よりも先生ご自身の語りを大切に受け取るように心した。1回の面談が終わると、それをもとに考察し、次回は私の解釈を島袋先生に示し、先生ご自身の考えを伺いながら深めていくという形をとった。1回の面談は、約2~3時間であり、本論文の作成までに、研究1で考察

表1. 面談の内容

(1) 師弟関係を通じた陶工としてのアイデンティティ形成の特質とプロセス

- ① 今日、陶工を志望する人はどのような動機づけでこの世界に入ってくるのか。
- ② 入門後、一人前になるまでの過程の中でのポイント・身につけるべき資質はどういうものか。そこに師が果たす役割とは何か。弟子は師から何を学ぶのか。
- ③ 独立した弟子との関係・関わり。

(2) 師弟関係の時代による変化

- ① 一世代前の徒弟制度が生きていた時代と現代の訓練・教育の相違。
 - ② 学校という教育システムとは異なる職人教育の特質。
 - ③ 時代による作陶技術の進歩は、職人の生き方・仕事・人間関係(特に師弟関係)に影響しているか。
-

した2回の面談をあわせて4回の面談を行った。

結果と考察

1. 師弟関係を通じた陶工の熟達と継承のプロセス

(1) 師弟関係を通じたマイクロな継承 —入門から独立までの熟達のプロセス—

陶器職人の世界において、日々、仕事の場をともにした face to face の師弟関係の中で、弟子がその精神と技を受けついでいくプロセスはどのようなものなのであろうか。「お弟子さんの入門から独立まで、陶工として熟達していく上で、必須のポイントは何か」「先生と日々、顔を合わせて、ともに作業をする中で、お弟子さんに伝えられていくものは何か。それは、どのように伝えられていくのか」という問いに対して、以下のような語りが得られた。ここでは、第3回、第4回の面談を中心に合計4回の面談から得られた島袋常秀先生の語りを可能な限り忠実に記述し、その後、これらの心理学的意味について考察する。

1) 入門の動機

第一に重要な問題は、弟子が工房に入門する際の動機、つまり陶器作りを自らの仕事にするための姿勢である。島袋常秀工房は、磁器やオブジェではなく、陶器、中でも食器を中心に製作している工房である。常秀工房に入門を志すには、まずこのような工房の特質と方向性を理解し、それに同意しなければならない。

入門に際して、もう一つの重要なポイントは、入門者の主体的な意志が厳しく問われることである。親方の方から入門を勧めることは絶対にしない。入門者が自らの意志で主体的に門をたたくまで、親方はじっと待つ。従来、芸術、学問、宗教などの世界では、傑出した師の仕事や人柄にほれ込んで、その世界に入門を志した人は少なくない。現在の常秀工房では、常秀先生の作品や技量に魅力を感じて入門する人もいれば、とにかく焼物をやりたいと、陶芸については未経験でこの世界に入ってくる人もいる。たまたま工房が陶工を募集していたのに応募した人もいる。しかしながら、いずれにしても主体的に自分の意志でこの世界を選び取ることが重要である。

2) 仕事のシステムを身につけることと作陶の全工程に責任を持つこと

第二は、陶器作りという仕事の全行程を身につけることである。これは、仕事の基本でありながら、非常に困難な課題である。第三者からみれば、陶芸とは轆轤を挽くことによる器作りであるとイメージされやすいが、一つの器ができ上がるまでの工程は、きわめて複雑で長い時間を要する。ある部分は体力と忍耐力、ある部分は集中力と手と目の精緻さ、ある部分は感性や勢いなど、さまざまな能力が必要とされ、持続力が求められるプロセスである。

特に、陶器の素材となる土作り、つまり自然から採取した土を整え、ブレンドして器の成形に適した土を作り上げる仕事は、体力と忍耐力を要する厳しい作業である。今日では、土練機という土をブレンドし整える機械が開発されたが、かつては多くの工房では新人の下積みの仕事であった。その他の雑務の多くも、一般的に新人の仕事であった。

しかし、常秀工房では、土作り、成形、絵付け、焼成(窯焚き)、仕上げの調整などの工程は、すべてスタッフ(弟子)全員の共同作業によって行われている。現在、分業制をとっている工房も多い中、常秀工房では、ひとつの器の完成までの作業はすべて、各々のスタッフが責任をもって行う。これは常秀先生が考案された方法であり、独立までの近道であるという。器の量産のためには、分業の方が能率的であり、工房経営の視点から見ると、その方がよいかもしれない。しかし分業では、自分の担当する部分しか身につけることができない。弟子は、自分の成形した器は、最後まで責任をもって完成させることによって、将来、自分が独立した時の心構えと技が修得できるのである。

しかしながら、弟子によって能力の個人差があることもまた事実である。仕事の流れをつかむのに時間のかかる人もある。しかし、常秀先生は、それを否定するのではなく、弟子の一人一人の特性や能力に合わせて仕事の流れを考えるとされる。技量や特性の優れた人は、レベルの高い器を担当し、そうでない人はそれほど難しい技法を用いなくてもできる器を受け持つというように。これは、師が弟子の能力や特性をしっかりとみて理解していないとできないことである。

3) 師を「見て覚える」

常秀先生によれば、職人としての成長に最も大切な力の一つは、「見る」力である。職人の技は、言葉にならないものと言われ、言葉では伝えることができないとされてきた。ゆえにその技の継承は、口伝の形をとったり、「師の技を盗む」と言われてきたことも少なくない。言葉による教示ではなく、師を「見て覚える」とは、どういう営みなのであろうか。

常秀工房では、親方である常秀先生が見本となる器を轆轤で挽き、工房に置いている。弟子は、それを見本にして自分の担当する器の作陶を行う。その後は、親方は口をはさまない。工房は広い作業場に、壁を背にして向かい合う形で親方とスタッフそれぞれの轆轤が並ぶ。常秀先生が成形や絵付けをするときは、スタッフは「さりげなく」親方の仕事を見て、自分のものになっている。親方が、新しい技法を用いたり、厨子甕、大きなシーサーなど、日常では作成しない作品を作るときは、親方が弟子たちを集めて「しっかりと見せる」。

「見て師の技を盗む」ことは、常秀先生自身の人生においては、幼児期からすでに体験されている。父上の島袋常恵氏は、常秀さんに陶器作りについて何も教えなかった。しかし、陶器作りという父の仕事は、常秀少年から見ると魅力的な仕事であった。父は、轆轤の名手であり、自在に轆轤を挽いて成形していく。常秀さんは、その父親のそばで、父の仕事、しぐさをじっと見ている。「このように手を使うとこうなる」と見ていて、父が轆轤を離れた隙にさっと、その座に座って自分でやってみて覚えたという。この観察力は、驚くばかりである。そして、8歳の時には、蹴り轆轤を自在に操り、大学卒業時には、あらゆる技を身につけていた(岡本, 2010)。このような集中した観察力が、上達の基本なのであろう。そして、それらの技を身につけることは、繰り返し繰り返しの作業による。

4) 繰り返しの作業

職人の仕事の多くは、集中力を要する繰り返しの作業である。同じ形の器、同じ絵付けの器を一日に100個以上も製作する。また、年に4回の登り窯による焼成に合わせて、3カ月を一つの周期として、土作りから成形、絵付け、窯焚き、仕上げの工程が繰り返される。常秀工房の作品として

出荷するためには、作り手によって、形や絵付けが異なってはならない。この統一性を身につけること、つまり、ぶれずに同じ形、同じ絵付けができるように、自らを訓練する必要がある。窯焚きの周期にあわせ、かつ日々の繰り返しの作業によって、職人一人一人に「統一性」が身につけていくのである。

5) よい作品が弁別できること

作品の統一性が身につくことは、よい作品とそうでない作品の相違がわかることを意味する。陶器作りの大きな3つの工程である成形、絵付け、焼成のうち、成形と絵付けは、弟子それぞれの技量が反映される。一方、焼成(窯焚き)は、親方である常秀先生が、焼成の温度の調整や時間等の責任をもつ。窯出し後、工房では、あまりよい出来でない作品については、成形、絵付け、窯焚きのどこに問題があったのか、批評会が行われる。成形や絵付けに問題がある場合は、弟子自身が自らの技を訓練していかなければならない。

6) 感性を身につける:「美を感じ受けとめる力」と「それを消化し作品として生みだす展開力」

感性を「教える」ことは、非常に難しい。陶工自ら、感性を磨きあげる他はない。感性を磨くコツは、よい作品を数多く観て、自分のものにしていくこと、自分がこれだと思える作品を見つけ出して、それ以上のものを創り出そうとすることであると、常秀先生は言われる。

感性を身につけることは、3)で述べた「見る力」と深く関わりあっている。「見る力」には、見る側の感性が非常に重要である。一つの作品を見て「万感にくる」こと、ここからその、心を動かされた作品を自分のものにするプロセスが始まる。常秀先生は、始めは、その作品の写しでよいと言われる。模倣して製作した作品でも、土や釉薬が異なるとまた異なった雰囲気をもった作品となる。それは、「師から受け取ったものを自分を通して出す」ことでもある。心を動かされた作品をイメージしながら、繰り返し作り続けていると、「あ、これだ!」というものが出てくる。同じものを作ったつもりでも、また登り窯の焼成の具合によっても、全く異なる雰囲気をもった作品ができ上がることがあるという。

常秀先生の作品は、岡本(2010)でも述べたように、巻唐草、呉須蠟抜き貝紋、でいごや月桃、ミンサー織の紋様をアレンジしたものなど、沖縄の自然や文化に根差したオリジナリティが見られる。しかしながら、常秀先生によると、それらのデザインや技法には、必ずその源となるものが存在する。例えば、常秀工房の作品の代表的な技法のひとつである「かきおとし」は、もともとは中国の磁州窯にみられたものである。しかし、沖縄の土と釉薬で作陶すると、それは別の味わいを醸し出す。また、ミンサー織の紋様を焼物で表現するとどうなるかという試みは、常秀先生のオリジナリティを生み出した。これらは、自ら深く「美を感じ、受けとめる力」と「それを消化し、作品として生みだす展開力」の具体的な営みとして感銘を受ける。

この「感性を身につける」という技芸の継承にとっての中核的な営みについて、他の陶芸家も自らの体験を書き遺している。例えば、彩釉磁器の部門で人間国宝となった九谷焼の陶芸家 故 第三代 徳田八十吉氏は、若い頃、真っ白な布の真ん中を切り裂いて一本の線を示したフォントナの作品に心を動かされ、以後の作陶人生に大きな影響を受けた。氏は、「心の中の1本の美しい線」について、次のように述べている。「自分が何を美しいと思うかを自分の中に見つけることは難しい。本当

は、自分が美しいと思うものを自分の中に見て創り出せばよいのだが、抽象的なものなのでなかなか見えない。だから、自分の心の中を覗くためには外を見るとよい。気に入った線は、自分の心の中で認めている美しさである。だから外を見て、美しい線を探しなさい。あなたが美しいと思った線が、あなたの心の中にある線なのである。」(乾・朝日新聞社,2011)

7) 技と感性を發揮したオリジナリティの獲得

そして、ある程度以上の技量と感性を身につけた弟子は独立して、自分の窯を開くことになる。入門から独立まで、大学で陶芸を専攻した人は5年程度、0から始めた人々は10年くらいの歳月を要するということがあった。

独立した後は、師も弟子も対等の親方同士となる。独立後は、かつて師であった親方に相談をもちかけることはない。自分の工房の問題は、すべて自分で解決する。常秀先生自身も相談する相手はなく、自分で解決するしかないと言われる。作陶の過程で、これまで経験したことのないことが起こると、専門書を読んで考える。しかし、本を読んでもわからないことも多いという。特に釉薬の研究は、古い資料を見ながら試験体を作り、試行錯誤を繰り返しながら経験を積み上げていく。プロの仕事師の探究の姿がここに見られる。どの分野においても、専門家としての自己研鑽と研究は、生涯を通じて行われるものである。

8) 継承の2つのタイプ

一人前の陶工として独立した弟子たちのその後は、非常に興味深いことに、2つのタイプに分かれる。常秀工房でスタッフとして働き、独立していった人々は、現在約30名に上り、陶芸で生計を立てている。この人数は、この世界では驚異的である。現在でも陶工として独立して生活していくのは厳しいといわれる。しかしながら、門下の独立した30名余の弟子の中で陶工をやめた人はいない。

第一のタイプは、常秀先生の作風を受け継ぎ、次第に自分の持ち味を出していった人々、第二のタイプは、独立と同時に師の作風を断ち切り、オリジナルな作風で製作を始めた人々である。弟子は皆、常秀工房で、土作りや釉薬作りの基礎から加飾、焼成、仕上げまで、数々の技を学んだが、第一のタイプは、ここで学んだものをすぐには捨てられない。しかし、独立して自分で作陶しながら、作風は少しずつアレンジしながら変わっていった。それに対して、第二のタイプは、壺屋焼の伝統や師とは異なった自分の美感を前面に出してやりたい気持ちが強い。常秀先生は、いずれのタイプでもよい、自分で納得して自分の世界をきわめていけばよいと言われる。親方として弟子に伝えてきたことは、①陶器職人として「生活していける」こと、②陶工ではなく、陶芸作家として生きていきたいならば、作品にオリジナリティがあること、③用に即した、つまり単なる鑑賞陶器ではなく、使える器であることである。

(2) Erikson の個体発達分化の図式から見た入門から独立までの熟達のプロセス

これまで述べてきたように、島袋常秀先生によると、陶工の熟達のプロセスには、次の7つのポイントがあることが示唆された。

- ① 入門の主体的な意志(親方の専門的世界を主体的に選び取る)
- ② 仕事のシステムを体得する(仕事世界のルールを血肉にする) ことと責任性(作陶の全ライン

に責任をもつ)

- ③ 見て覚える (感性を発揮して師を「見て技を盗む」)
- ④ 繰り返しの作業(繰り返して技を身につける)
- ⑤ 良い作品の弁別
- ⑥ 感性の獲得 (よい作品を多く見て自分の感性を磨く)
- ⑦ 技と感性を発揮したオリジナリティの獲得

この専門家アイデンティティ形成のプロセスを、Erikson の個体発達分化の図式と照らし合わせながら考察してみたい。この熟達の各段階にみられる課題を、Erikson の図式の視点から捉えると、表 2 のように理解することができるであろう。

表 2. 弟子と師の側から見た陶工の Profession の生成と継承の段階と特質

1. 入門	
① 弟子の側	陶工という職業・親方の専門性主体的に選び取る。
② 師の側	入門者の主体性を待つ。
③ 心理的課題	親方と仕事世界への信頼。師と弟子が同じ世界・方向・価値を共有する。
④ 専門的仕事世界における段階	Stage V-1: 仕事世界における基本的信頼感

2. 仕事のシステムを体得する	
① 弟子の側	(関心ある仕事だけでなく)雑役・重労働に耐える。
② 師の側	仕事のルールを示す。実際に行動させる。
③ 心理的課題	辛抱・忍耐する。この世界のルールを知り、それに従う。
④ 専門的仕事世界における段階	Stage V-2: 仕事世界における自律性

3. 責任性	
① 弟子の側	自分の作ったものに最後(その作品の完成)まで責任をもつ。
② 師の側	作陶の全工程を体験させる。自立への確実な道筋(心構えと技)を示す。
③ 心理的課題	他者と歩調を合わせつつ、自力でプロセスを遂行する。
④ 専門的仕事世界における段階	Stage V-2: 仕事世界における自律性

4. 見て覚える	
① 弟子の側	感性を発揮して師を見て技を盗む。技の重要なポイントを自ら発見する。
② 師の側	親方は教えない。常に自分の仕事を見せる。
③ 心理的課題	自発的・主体的に「見る」。

- ④ 専門的仕事世界 Stage V-3: 仕事世界における自発性
における段階
-

5. 繰り返しの作業

- ① 弟子の側 繰り返して技を身につける。作品の統一性を身につける。
② 師の側 仕事場で共に作業する。工房の特質を明確に示す。
③ 心理的課題 勤勉性にもとづく有能感の獲得
④ 専門的仕事世界 Stage V-4: 仕事世界における勤勉性と有能感
における段階
-

6. 良い作品の弁別

- ① 弟子の側 良い作品とそうでない作品の相違がわかる。
② 師の側 窯出し後の批評会 (特に成形・絵付けの技についての教育)
③ 心理的課題 仕事世界における弁別学習
④ 専門的仕事世界 Stage V-4: 仕事世界における勤勉性と有能感
における段階
-

7. 感性の獲得

- ① 弟子の側 良い作品を多く見て自分の感性を磨く。
② 師の側 良い作品を見せる。
③ 心理的課題 感性と技を身につけた陶工としての独立
<独立後> 技と感性にもとづいたオリジナリティの発揮
④ 専門的仕事世界 Stage V-5: 仕事世界における自立
における段階
-

1) 基本的信頼感

Erikson がライフサイクルにおける発達最早期にあたる乳児期の心理社会的課題として挙げたのは、「基本的信頼感」である。私たちが生きていくためには、自分をとりまく世界を信じ、周囲の人々を信じ、自分自身を信じられなければならない。この感覚は、生まれた時から、最も身近な母親や父親との関わりを通して得られるものである。

陶工の熟達のプロセス①「主体的意志をもって入門すること」は、職業選択における主体性が大前提となっているとはいえ、この基本的信頼感と同じ心理的テーマを示唆している。入門は、師とその仕事世界を信頼して、その世界に入ることであり、師と弟子が同じ専門世界とその価値を共有することである。乳児が母親をはじめ周囲の人々との関わりの中で、自己と他者に対する安心感、基本的信頼感を獲得していくように、専門的仕事世界へ入門した新人もまた、自分はこの世界にいてもよい。自分のまわりにいる人々は信頼できる人たちであるという基本的信頼感がなければ、こ

れから陶工として生きていけない。つまり、専門的仕事世界におけるもっとも土台となる段階の心理社会的テーマは、仕事世界における基本的信頼感である。

2) 自律性

Erikson が第Ⅱ段階 幼児初期の心理社会的課題として挙げたのは、自律性である。これは、外からの力を受け入れ、自分の衝動を統制する枠組みを内在化していくことである。この外からの要求と自分の内からの要求のバランスをとることは、非常に難しい心の作業である。換言すると、自律性とは、自分が生きている世界には、「法と秩序」という決まり・ルールがあることを心と体で学ぶことである。

熟達のプロセス②「仕事のシステムを体得する（仕事世界のルールを血肉にする）ことと、③責任性（作陶の全ラインに責任をもつ）」ことは、まさに固有の仕事世界における法と秩序を身につけていくことを示している。自分のやりたい作業、関心のある仕事だけでなく、陶器作り全体の雑役や重労働に耐えることである。師の側からみた課題は、この世界にはルールがあることを示し、それらを実際にできるように導くことである。

3) 自主性

Erikson によれば、3,4 歳から 5,6 歳に成長した幼児後期(第Ⅲ段階)の心理社会的課題は、「自主性」である。自主性とは、幼児初期の外的、内的な力を統制できる能力を獲得した後、自分の要求を表現できる力である。外的、内的なバランスを保ちつつ、自分が主体的に行動できることである。この時期に幼児の心の中には、理想的原型ともいうべき、社会的価値や秩序に関連した要素が形成される。幼児は、日々の遊びをとおして、父親、母親のまねをし、男の子は父親「らしく」振る舞い、女の子は、母親「らしく」ふるまって、「自分」というものの土台を形成する。力動心理学では、これを「同一化」と呼ぶ。

陶工の熟達のプロセス④「見て覚える」ことは、親方の「手」(=技)を自分の手にすることであり、深く師に同一化することである。はじめは、師の仕事を「まねてやってみる」のであったであろうが、その繰り返しの作業の中で、陶工としての適確な動きができるようになっていく。この過程の中で、単なる技能という行動レベルだけでなく、親方の職人としての生き方への同一化も進んでいくと思われる。

4) 勤勉性

第Ⅳ段階 児童期の子どもの心理社会的課題を、Erikson は、「勤勉性」と呼んだ。これは、学童期の子どもが勉学に励む姿である。学童期の子どもたちは、毎日繰り返し、文字を練習したり算数の問題を解くことによって、読み書きや計算のやり方を身につけていく。内的な知的な関心と外からの要求のバランスがとれて育ってくるものが「有能感」である。「自分は自分なりにやっていける力がある。そして学ぶことはおもしろい」という感覚である。この有能感は社会の中で生きていく上で欠かすことのできないところの力となり、支えとなる。

陶工の熟達のプロセス⑤「繰り返しの作業の中で技とその統一性を身につける」ことは、3)で述べた自主性の段階と表裏一体の特質をもっている。陶工の繰り返しの作業による技の獲得もまた、「自分も陶工としてやっていける。この仕事はおもしろい」という有能感の感覚と勤勉性という同

じテーマが現われている。

このようなプロセスは、図 1.のようなイメージでとらえることができるであろう。つまり、仮説(2)で述べたように、Erikson の 個体発達分化の図式から捉えると 弟子の陶器職人としての熟達のプロセスは、その専門的仕事世界の中で第 I 段階から第 V 段階までのテーマが順に経験されている。一方、師の側から見ると、弟子のプロセスと表裏一体の形で、第 VII 段階(世代継承性)の中で、第 I 段階から第 VII 段階のテーマが現われている。つまり、弟子の第 I 段階から第 V 段階までの課題が達成できるように見守り、支え、援助するというプロセスである。両者は、師弟の関係性の中で相互に体験されていることが示された。この相互の営みと心理的課題への取り組みは、ミクロな次元での **Profession** の生成と継承の具体を示すものであり、他の専門的仕事の継承にもあてはめることができるであろう。

以上の知見を総合すると、**Profession** の生成と継承のために師と弟子の側に求められることは、次のようなことであろう。師の側に求められることの第一は、自らの獲得した専門世界・仕事を弟子に「見せ」、それに魅力を感じた人を自分の世界に「入れる」こと、「場」を与えることである。これは、師と弟子が一つの専門世界・方向性・価値観を共有することであり、相互の信頼感の形成を意味する。第二は、その専門世界には従うべきルール・きまりがあることを示し、それを身につけるように導くことである。この専門的世界におけるルールとは、作陶の技法やそれぞれの工程の

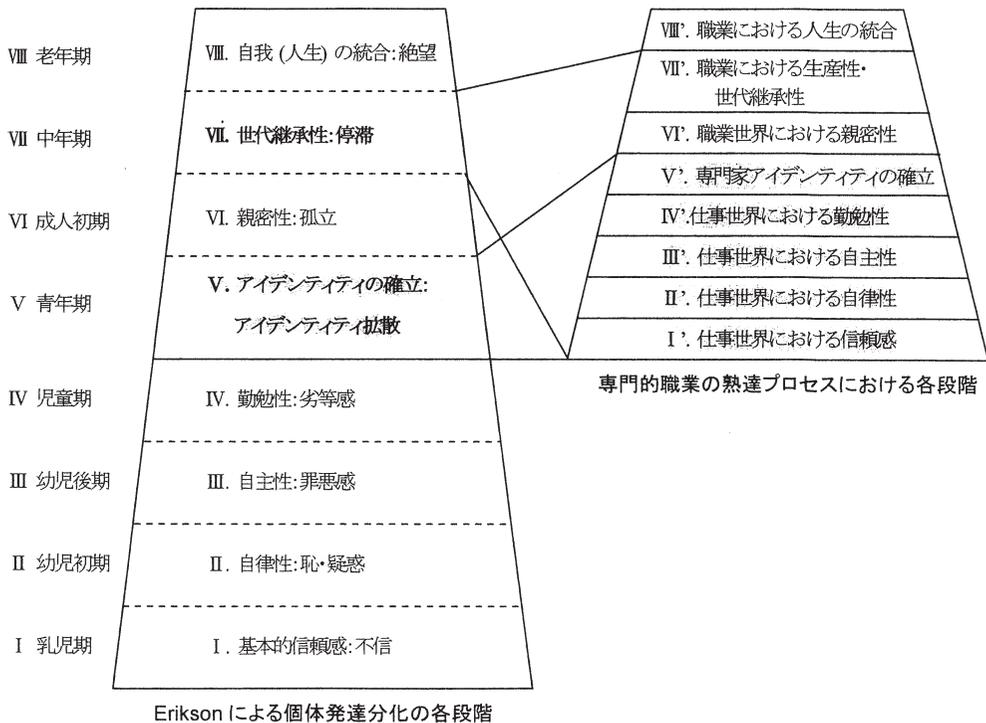


図 1 ライフサイクルおよび専門的職業における心理社会的課題の体験過程の関連

遂行のし方をはじめとして、この世界で生きていくためのあらゆるきまりである。これは、専門世界における自律性を意味する。第三のテーマを付け加えるならば、それは、「見守る」という営みであろう。

弟子の側に求められる資質は、上記の師の側に求められるテーマと表裏一体のものである。つまり、師の専門的世界と仕事(そこには、師の人間性、人柄も含まれるかもしれない)に、「魅せられる感性」と「活力」であり、仕事世界のルールを血肉にする努力を支える持続のエネルギーであり、自らの主体性と感性を發揮して「見る」力である。人間の自我の発達の基盤となる心理社会的課題が、専門的職業世界における熟達の土台となっていることは、きわめて示唆的である。

2. Profession の継承を支える風土

ここまで、師弟関係を通じた陶工の熟達のプロセスについて考察してきた。しかしそれは、単なる弟子と師の成長の物語ではない。沖縄では、陶芸や染色・織物など、17世紀以来、300年余にわたって独特の高い文化が継承されてきたことは、職人の人生と仕事を支える沖縄ならではの風土が存在するゆえんであると考えられる。ここでは、陶器職人の **Professional Work** を支える沖縄の文化的背景、つまり沖縄のものづくりの基盤となっている風土について考察する。

(1) 「基本的信頼感」と感性の基盤

沖縄壺屋焼の伝統を継承してきた那覇市壺屋では、現在も祭祀と祈りが日常的に行われ、陶器職人の仕事の精神的支柱となっている。沖縄では、独特の歴史・風土に根差した信仰や神話が現代社会にも息づいている。島袋常秀先生のもとで修業し独立したお弟子さんの一人は、「沖縄では神様がすぐ近くに感じられる。だから、いいかげんな仕事はできない」という。

沖縄では古来、宇宙をつかさどり、創造の神である天帝、東の海の彼方にあるニライカナイからの来訪神、琉球神話の神であるアマミキヨの3つの神を最高神とし、その元に様々な神が宿り、人々の暮らしと結びついていると信じられてきた。神にまつわる聖地である御嶽(うたき)には、村や村人を守護する神がいると考えられ、拝願(うがん)は、1年を通じての重要な行事となっている。また、泉や井戸、大木や巨石にも神が宿ると考え、守護を祈願した。壺屋では、大木の下(カ-)は聖地であり、年に8回、火の神、水の神に対する祭祀が行われる。それをつかさどる祭司は、母系で継承されている。

岡本(2010)で述べたように、焼物作りは、土・水・風・火というという自然と一体となった営みである。登り窯での火入れの儀式では、親方が、窯に泡盛、米、塩を供え、「うましみそうり」(よい器が生まれますように)と火の神に祈る。火・水・土に対する自然信仰と感謝は、陶工たちの共通の精神性を形成してきた。そして、壺屋は、火・水・土の神によって守られた世界・共同体であった。

一方、焼物の技についてみれば、轆轤は焼物の技の中核である。轆轤は、車とも関係の深い、古来もっとも重要な技術と言われている。近代工業の核心のひとつである旋盤は、轆轤の発展形であ

る。轆轤は、5 世紀に日本に伝わり、壺屋では 17 世紀になると、轆轤を用いた本格的な作陶が始まった。轆轤は 17 世紀にすでに完成された技術として存在し、後に蹴り轆轤にかわる電動轆轤や機械轆轤が開発されたが、その基本的な技術は変化していない。常秀先生は、現在もなお、蹴り轆轤で作陶されている。轆轤という機器を自在に使いこなす職人の技とは、轆轤と一体となった手・腕・足・感性という高度な技能である。

この伝統的な機器と技を継承し続けているところから、独自の創造性が生み出されている。陶芸をはじめとする沖縄の伝統的技芸は、日々進化していく最先端の高度な技術で新しいものをどんどん製作するのではなく、古来、何もないところから工夫して、生活の必需品を生み出していった。それは、見る、さわる、感じるという感性、つまり人間のもっとも本質的な力を大切に、ものを生み出すという営みであった。作陶の土や釉薬の原料など、その素材は自然からいただくものばかりである。このように伝統的な技術を継承して、人間のもっとも根源的な力を大切にしてきたことが、独創的な「用の美」の実践哲学を作り上げてきたと考えられる。それは、「神」を日常に感じ、祈りと機器を用いた仕事が一体となった世界である。

陶器作りの仕事はまた、循環的世界観・人生観を生み出しているのではないだろうか。轆轤の回転は地球・宇宙の回転へとつながる。また陶器作りは、3 カ月ごとの登り窯での焼成を軸とした周期性をもっている。これらは、自然とともにそのめぐりの中で生きる人間の営みと、はからずも合致したものである。このような根源的なものに守られた「安心感」によって、心奥の感性が賦活されているように、私には思われてならない。

(2) 継承性と沖縄の開放性・柔軟性について

現在、沖縄の陶器作りが発展していることは、沖縄文化・風土独特の開放性・柔軟性がプラスに作用しているのではないだろうか。常秀先生の父上の時代は、陶器職人としての生活は非常にきびしい時代であった。また常秀先生の成長期も戦後の厳しい時代であった。それにもかかわらず、私は、沖縄の陶器職人の世界の開放性、柔軟さを感じる。

例えば、大正から昭和にかけて、浜田庄司氏らが沖縄を訪れ、壺屋の陶工に出会った時、浜田氏は、本土の職人は自分の技を隠し他者に悟られないようにするのに対して、壺屋の陶工は、隠さず何でも見せてくれることに驚き、感銘を受けたという。それは、今回の研究において、常秀先生に面談した際の私自身の感銘でもある。この開放性が、翻って沖縄文化のレベルの高さを世界へ知らしめることにつながっているのではないだろうか。それは、沖縄の文化的自信と言えるかもしれない。

3. Profession の「世代継承性」に関する研究における今後の課題

アイデンティティ研究は、この 60 年間にすでに数多くの研究の蓄積があるのに対して、Generativity 研究、中でも Profession の生成と継承に関する心理学的研究は、未だほとんど行われていない。学問・技芸など長い歴史をもつ分野の継承プロセスとその心理的特質のミクロな分析は、今後の重要な課題である。また、Profession の継承と深化のための「師弟関係」のあり方、つまり、

旧来の徒弟制度ではない、現代社会に適した **positive**、かつ生産的な師弟関係とはどのようなものかという問題の考察は、世代継承性の危機の時代の重要な課題であろう。

<附記>

本研究は、日本質的心理学会第8回大会 大会講演「師弟関係を通じた **Profession** の生成と継承—世代継承性のマクロとミクロな視点—」をもとに加筆したものである。

本研究は、島袋常秀氏に予め校閲をいただき、許可を得て公刊した。最後に本研究にあたって、ご多用な中を総計 10 時間を超える面談に応じていただき、ご自身の経験をおしみなく語っていただいた沖縄県立芸術大学教授、島袋常秀工房 陶主 島袋常秀先生に心よりお礼申し上げます。

引用文献

Erikson, E.H. (1950). *Childhood and society*. New York: W.W.Norton.

(仁科弥生(訳) (1977,1980). *幼児期と社会 1・2* みすず書房)

乾 由明(監修) 朝日新聞社企画事業本部文化事業部(編) (2010). 追悼 人間国宝 三代 徳田八十吉展 —煌めく色彩の世界— 朝日新聞社.

McAdams, D.P. & Aubin, E.S. (1998). *Generativity and adult development*.

Washington, D.C.: American Psychological Association.

岡本祐子 (2010). 陶器職人における専門家アイデンティティの生成と継承 I

—島袋常秀氏の人と仕事をめぐって— 広島大学心理学研究, **10**, 121-145.

岡本祐子 (2011). 師弟関係を通じた **Profession** の生成と継承—世代継承性のマクロとミクロな視点— 日本質的心理学会第8回大会プログラム抄録集, Pp.30-31.

四方田犬彦 (2007). *先生とわたし* 新潮社.